様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０５３

研究課題名（和文）新教育運動期における都市計画と学校の遊び環境の公共性に関する比較社会史的研究

研究課題名（英文）A comparative, social, historical study on children's play environments in the public school and city planning in the era of the New Education Movement

研究代表者
宮本　健市郎（MIYAMOTO, Kenichiro）

関西学院大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２２９８８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、19世紀末から20世紀前半に世界中で盛り上がった新教育運動に焦点をあてて、子どもの遊び場がどのように確保されたかを確かめた。この時代は、急激な都市化が進み、子どもは遊び場をなくしつつあったが、同時に、学校教育や社会教育のなかで、子どもに遊び場を提供することの必要性がひろく民衆にも意識されるようになっていた。その具体的な状況を、ボストン、シカゴ、ニューヨーク、ロンドン、ハンブルクをとりあげてたしかめた。
　その結果、子どもの遊び環境として、大都市に公園を設置しようとする動きがあったこと、公園と学校の連携をつくろうとする都市計画があったことなどが、明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　In the late 19th and early 20th centuries, children in large cities were troubled by the lack of playgrounds which they had had before urbanization. Philanthropists, city planners, architects, and educators considered playgrounds and play opportunities essential for the education of children. The Playground Movement started in large cities in industrialized countries. We investigated the appearances of large parks and playgrounds in, or around, New York City, Chicago, London, and Hamburg.
　Some educators, e.g. Clarence A. Perry, participated in city planning for maintaining playgrounds for children, and strengthened the relation between school and park. Some architects, e.g. F. Schumacher, designed parks for children as well as for citizens. There appeared schools with playgrounds, playground associations, and garden cities around metropolitan cities. Eventually, environments for children's play became significant in schools as well as in city planning of large cities in this era.

研究分野：教育史

キーワード：新教育　遊び場　公園　アメリカ教育史　ドイツ教育史　イギリス教育史　進歩主義教育　運動場

１．研究開始当初の背景

「新教育」の実践に関する研究には多くの蓄積があるが、その多くは「田園都市」と密接に結びつけて語られてきた。田園都市はイギリスで、19 世紀末に生まれた。それは、大都市の非人間的環境と対立するものであって、「新教育」を生み出す基盤とみなされ、田園都市で展開した「新教育」の実践が紹介されてきた。米国では、田園都市を模して、1920 年代に大都市郊外に出現した富裕層のためのコミュニティ（シカゴ郊外のウィネトカ、ニューヨーク郊外のスカースデールなど）が「新教育」を実践する舞台になった。

このような観点からの「新教育」研究は少なくないが、少なくとも三つの問題点を指摘することができる。ひとつの問題点は、「新教育」実践の物理的基盤であった都市そのものの教育的機能や意義についての研究が深まっていないことである。そのことは、都市計画史研究と教育史研究とのつながりのなさから来ている。都市計画（史）の分野では、労働、住居、医療、交通等の関連のなかで、人間の生活に関わるさまざまな施設（学校、公園、図書館など）の機能を検討する研究が増えつつある。一方で、教育史研究の分野では、教育実践の現代的意義が強調され、その実践を可能にした社会的基盤や、地域の歴史的特性の検討が不十分であった。たとえば、学校改革を推進した教育者の教育理念や実践をとりあげたとしても、設立された新教育の学校が、大都市の中のひとつの組織として、どのような役割を持っていたか、都市の生活者にどのような影響を与えたか、さらに、都市計画とどのような関連をもっていたかということは、明らかではない。

もうひとつの問題は、田園と大都市との対立を前提にしていることである。田園都市の出現が反都市の具体化のように見えるのは一時的に過ぎない。世界史の流れの中でみれば、田園都市の創造は世界全体の大都市化の一部分とみなすことができるであろう。さらに、現代のように、交通や通信が発達し、大都市圏が限りなく広がりつつある時代においては、都市と周辺との区別は曖昧になりつつある。田園都市の中に、じつは世界の都市化を合理的に進める契機があったのではないだろうか。大都市のなかにあった「新教育」の学校は、子どもに「アジール」を提供することで、大都市のさらなる拡大をもたらしたのではないだろうか。しかし、大都市圏が拡大する一方で、地方が衰退していくという現象は表裏一体のものである。都市と田舎をつなぐ方法としての学校教育と都市計画のあり方を問う必要があるだろう。

さらにもうひとつの問題は、大都市の変貌過程を考慮にいれていないことである。19 世紀末から 20 世紀にかけての学校改革は、継続的に進められた大きな都市計画の三つの段階に対応していた。都市計画についての歴史的研究によると、近代的都市計画の第一段階は、19 世紀後半から始まった国家・地方自治体が都市問題への対策として行なった物的環境の統制、第二段階は、19 世紀末から都市郊外における「田園都市」の創出、第三段階は 20 世紀後半に大都市圏地域全体の高度な空間整備であった。大都市の近辺で、19 世紀末に都市計画が開始されたことはイギリス、ドイツ、アメリカに共通するが、欧州の「新教育」はこの第二段階から始まり、米国の「新教育」は第一段階から出現していた。各国における都市計画の段階の違いが学校改革のあり方にも反映していた。そのことが、各国における遊び場運動の性格の違いをもたらしていたと考えられる。

以上のような問題点を確認すれば、都市計画の一環として「新教育」を捉えることの有効性が明らかになる。本研究は、19 世紀末から 20 世紀前半の大都市およびその周辺で展開した学校改革を、都市計画（学校建築を含む）の一部分として捉える。そして、その都市計画のなかで、子どもの生活と学習と遊びのための環境がどのような形で形成されようとしたのかを具体的に確かめる。現代の学校改革では教育の私事化が進みつつあり、学校選択制の導入に顕著にみられるように、公教育の地域的基盤が揺らいでいる。本研究では、大きな都市計画の中で学校改革を捉えることで、自由を求めた新教育の実践と、学校と地域とのつながり、教育の公共性等の問題を追究していく。

２．研究の目的

本研究は、子どもの「遊び環境」（遊びのための時間と空間と設備）の実態を解明することをねらいとする。具体的には三つの課題を設定する。

第一の課題は、大都市およびその近辺で始まった都市計画のなかで、子どもの「遊び環境」がどのような方法で確保されたかを確かめることである。19 世紀末、多くの大都市は急激に膨張し、環境が悪化していた。大都会にはスラム街が出現し、多くの子どもが遊び場を失い、街中や路上の不衛生で不道徳な場所で遊ばざるをえなくなっていた。この実態を改善することに、政治改革者や慈善家や教育者など、いろいろな人が取り組んだ。街路に遊び場を設置した慈善家や、大都市の中に、あるいは周辺に、大きな公園を設置するための立法化に努力したりした人もいる。これらの動きのなかから、都市計画という新しい枠組みが出現した。

一方、学校教育に着目すれば、遊びは伝統的な学校では主要な機能ではなかったが、「新教育」の学校では、遊びがもつ教育的な意義が認められつつあった。新教育が主張した自由を具体化したもののひとつが、遊びであった。多くの校舎には、運動場（プレイグラウンド）、遊び部屋、学校園、遊具など、

子どもが遊ぶための多様な環境が出現した。多目的室も遊びのために利用することが可能であった。このように、学校に遊び環境が出現したことは、遊びの教育的意義が認められたことの証とみることができるであろう。教育改革者は遊びにどのような教育的意義を見出したのか、その解明が第二の課題である。

都市計画のなかで設定された遊び環境と、「新教育」の学校のなかに作られた遊び環境との関連を確認し、その機能を解明することが、本研究の第三の課題である。「新教育」が主張した自由の象徴ともいえる遊び環境は、拡大を続ける大都市の中でいかにして存在しえたのであろうか。あるいは、どのように変貌しただろうか。遊びは個人の問題であり、計画性も公共性も持たないのが自然であろう。「新教育」が、あえて遊び環境を計画的に教育プログラムに組み込んだことは、当初から矛盾を孕んでいた。この矛盾の歴史を検討することで、学校教育の公共性と、学校と地域の関連について考察する手掛かりとしたい。

３．研究の方法

本研究では、ニューヨーク市、シカゴ、ロンドン、ハンブルクを具体的に取上げて、19世紀末におけるそれぞれの都市の発展状況を確かめて、子どもの遊び場および市民のための公園がどのような経緯で設置されたかを確かめた。遊び場協会等の団体の歴史や、建築家、都市計画家が残した資料を収集したうえで、現地調査を行なった。

４．研究成果

第１章では、19 世紀末にアメリカの各地の大都市で始まった遊び場運動をいくつかみていき、それらがアメリカ遊び場協会(PAA)という全国的な組織を作って活動をしたこと、その活動方針の転換までを追った。遊び場運動には、三つの型があった。第一は、ニューヨーク市のように、遊び場をなくした子どもに遊び場を与えるという児童救済から始まった例である。その場合、学校設備を民衆に開放しようとする運動と結びついた（学校中心型）。第二は、シカゴに見られるように、都市計画のなかで公園や学校を適切に配置しようとする動きがあった（公園型）。第三は、民間団体が子どもや青年にリクリエーションの機会を与えようとする動きである（民間団体主導型）。PAA は、当初は学校中心型であったが、1910 年代以後、第三の道を進んだ。その結果、PAA は学校教育とのつながりを失った。

第２章では、遊び場運動の学校中心型と公園型が、1910 年代以後、どのように展開していったかを確かめた。学校中心型は地域住民に学校の施設を開放する運動へと発展した。これを推進したのはクラレンス・A・ペリーであった。ペリーは、学校が中心にあって、周囲に公共の遊び場などが集約されている近隣住区論を提案した。学校を舞台として住民が学習やリクリエーション活動に自主的に参加し、顔と顔を突き合わせた親密な人間関係をつくり、民主主義や社会的道徳を学習することを期待したのである。しかし、近隣住区は住民の同質性を前提としており、コミュニティ自体が大都市から孤立していた点で大きな問題を抱えていた。一方、公園型の遊び場は、シカゴの建築家パーキンスが推進した。パーキンスは、大都市に自然環境を残すことや、学校と自然、学校と地域のつながりを重視して、学校が子どもにとって遊びの場所でもあるように、新しいかたちの校舎をデザインし、学校建築の大きな転換をもたらした。

第３章では、まず、産業革命の負の遺産に向き合うために出現した都市計画に焦点を当て、オープン・スペース、コモン、パークなど、様々な公共空間を一般庶民に提供した法・規程を概観した。そして、次に、産業革命の影響が浸透しつつあった 1810 年代から新教育運動が生起しその影響を如実に反映させた 1930 年代までの時期を対象に、子どもの遊び、プレイグラウンド（playground）、運動場（School Playground）、プレイフィールド（Playing Fields）などがどのように位置づけられていたかを解明した。そして、遊具を公園に最初に設置したウィックスティード社と全英プレイフィールド協会（National Playing Fields Association）の活動、さらにハドウ報告書『初等教育』（1931）の遊びに関する記述から、「遊びの権威づけ」・「遊びの商業化」、「遊びのカリキュラム化」・「遊びのシラバス化」といった状況を抽出し、最後に、新教育思想の「遊び環境」に史的限界があること、子どもの「遊び環境」は学校ではなく、地域社会の公園などで代替されたことを指摘した。

第４章では、20 世紀初頭のドイツ・ハンブルクにおけるもっとも大規模な都市計画事業の一つに数えられる「ハンブルク都市公園（Hamburger Stadtpartk）」を取り上げ、建築家・都市計画家フリッツ・シューマッハーの思想と活動を手がかりにしながら、公園とそこでの遊び場がいかなる理念のもとで建設され具体化されたのかを解明することを課題とした。あわせて、隣接する住宅地や新教育学校（リヒトヴァルト校）との関連で都市公園の機能について考察した。考察の結果、住居政策と緑地政策の関連のなかで都市公園が建設された点、都市公園では広大な水遊び場や広場等、特に子どもを対象にしたさまざまな遊び場が設置され、精神的能力と感性的能力の促進による「統一的な人間」の育成が目指された点、その意味で都市公園自体が新教育的な教育作用を及ぼすとともに、都市公園の豊かな自然とスポーツ施設が隣接するリヒトヴァルク校の生徒たちに日常的な

学習の素材と場を提供していた点を明らかにした。

第5章では、本共同研究が前回の共同研究「新教育運動期における学校の「アジール」をめぐる教師の技法に関する比較史的研究」（平成 23－25 年度科研費助成事業基盤研究(C) ）の成果を受けつつ、それを発展的に継承している側面を有していることを重視し、前共同研究において展開された「アジール」論を前提とした場合に今回の共同研究がどのように意味づけられるのかを考えた。「アジール」とは何かということについて論じた後で、19・20 世紀転換期を中心としたドイツにおける＜自然＞思考の空間文化の広がりについて言及し、そのような空間文化が有する「リエントリー」形式について検討を行い、二次的な「アジール」空間として解釈される可能性を示唆した。最後に、以上のことを踏まえたうえで、本報告書の第 1、2、3、4 章の内容を念頭に置きつつ、「アジール」論に対して、また都市における「遊び」空間に対して浮上する課題を示唆した。より具体的にいえば、その課題とは、近代の二次的「アジール」の多機能性をどのように解釈すべきか、という問いへの取り組みである。

本共同研究は、新教育運動期のアメリカ、イギリス、ドイツに焦点をあてて、大都市およびその周辺における「遊び環境」の実態、遊びの教育的意義、および遊び環境がもった機能、これらを解明することが課題であった。各章で明らかにしたとおり、新教育の時期に、遊びの教育的意義が認められ、大都市内もしくはその周囲に子どもの遊び場が出現したことは、これら諸国に共通していた。また、子どもの「遊び環境」としては、学校よりも公園のほうが一般的であったことも確認することができた。都市計画の中で子どもの「遊び環境」を考察しようとすれば、学校ではなく、公園が中心になるのは実は当然であったかもしれない。それにもかかわらず、本研究があえて「学校の遊び環境」を取り上げようとしたのは、学校による社会改造という新教育の理念に、研究代表者自身が捕らわれていたからであると認めざるをえない。

しかしながら、学校が子どもの遊び環境としてふさわしいものでなかったことは認めるとしても、新教育の時期に学校の環境が、遊びの要素を含みこむことで大きく変化したことも事実であった。学校カリキュラムの変化、新しい構造の学校建築、公園と学校とのつながりなどに、その傾向をみることが可能である。学校教育が遊びの要素を入れたとき、学校の環境がどのように変化したか、教育の理念がどのように転換したかは、さらに検討すべき課題として残っている。

本研究で十分に検討できなかったテーマが、「遊び環境の公共性」である。都市計画のなかで、公共空間である公園に遊び場をつくること、さらに、公園の遊び場に教育の機能をもたせようとする動きがあったことは、いくつかの事例から確かめることができた。新教育の理念は、たしかに社会に浸透していったのである。だが、そのことは同時に、公教育の範囲を学校に限ることなく、無制限に拡大させることでもあり、その意義と危険性をあらためて検討する必要があることを意味している。アメリカについていえば、第一次世界大戦をはさんで、遊び場運動の性格が大きく転換した歴史を振り返ると、子どもの身近な遊び場が、アメリカへの忠誠心を育てるための教育の場になった。学校教育のカリキュラムとは違って、遊び場の教育機能を明確に分析することは難しい。公教育の一環として、「遊び場」をみるならば、国家や社会とのつながりを含めたものでなければならないであろう。今後深めていくべき課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１１　件）

① Yamasaki,Yoko “Tetsu Yasui and Transcultural Influences in Educational Reforms for Women,” 武庫川女子大学『言語文化研究所年報』第 26 号　2016 年 101-121 頁（査読無）

②山崎洋子「イギリス新教育の歴史的・現代的意義と課題―教育における『自由』を考える」『教育新世界』第 64 号　2016 年　15-22 頁（査読有）

③山崎洋子「教育史研究と教師の教養形成―イギリス教育史家の省察に学ぶ―」教育史学会『日本の教育史学』第 59 集 2016 年 140-144 頁　（査読有）
http://doi.org/10.15062/kyouikushigaku.59.0_140

④山名淳「ドイツにおける『新教育』の歴史と現在－田園教育舎系学校の展開から考える－」『教育新世界』第 64 号　2016 年　29-34 頁　（査読有）

⑤宮本健市郎「ジョセフ・リーにおける慈善とリクリエーションの思想－アメリカ遊び場協会での仕事を中心に－」『教育学論究』（関西学院大学教育学会編）第 7 号　2015 年 179-188 頁　（査読無）
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/

⑥ Yamasaki, Yoko “Developing Citizenship: Lessons from British Progressives, Dramatic Method of Teaching by H. Findlay-Johnson (1912),” 『教育学研究論集』（武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻編）　第 10 巻　2015 年

pp.17-23.　（査読無）

⑦渡邊隆信「梅根悟における新教育観の変化－『新教育への道』（1947）と『世界教育史』（1955）の間－」、『研究論叢』第 21 号　2015 年　45-52 頁　（査読無）
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/detail

⑧山名淳「教育史にとって『実践』とは何か－上原専禄の＜教育史学＝人間形成の歴史学＞論の今日的意義－」『教育史フォーラム』第 10 号　2015 年　1-19 頁　（査読有）

⑨宮本健市郎「アメリカにおける遊び場運動の起源と展開－アメリカ遊び場協会の成立と変質－」『教育学論究』（関西学院大学教育学会編）第 6 号、2014 年、173-183 頁　（査読無）
https://kwansei.repo.nii.ac.jp/

⑩山崎洋子「イギリス教員養成の歴史から何を学ぶか－－教職の複雑さと進歩主義教育の時代」『近代教育フォーラム』第 23 号、2014 年　145-161 頁　（査読有）
http://ci.nii.ac.jp/naid/110010002394

⑪渡邊隆信「理論－実践問題と教職の専門性－＜教員養成の思想史＞に向けて－」、『近代教育フォーラム』第 23 号　2014 年　163-176 頁　（査読有）
http://ci.nii.ac.jp/naid/110010002395

〔学会発表〕（計　9　件）
①宮本健市郎　「19－20 世紀転換期における遊び場運動の出現と変質－子ども救済から市民性教育へ－」アメリカ教育史研究会　新大阪ホテル　大阪府大阪市、2017 年 1 月 8 日

②宮本健市郎　「ジョセフ・リーにおける『よい市民』形成の論理」関西学院大学教育学会、兵庫県西宮市、2016 年 3 月 16 日

③宮本健市郎　「アメリカにおける遊び場運動の変質とジョセフ・リーの教育思想－児童救済から市民性教育へ－」世界子ども学研究会、青山学院大学、東京都渋谷区、2015 年 10 月 24 日

④山崎洋子　「教育史研究と教師の教養形成－イギリス教育史家の省察に学ぶ－」　教育史学会　宮城教育大学、宮城県仙台市、2015 年 9 月 26 日

⑤ Yamasaki, Yoko　“Yasui Tetsu (1870-1945) and transcultural influences in educational reforms for women,” International Standing Conference for the History of Education, 37th Conference held at Intanbul University, Turkey, June 25, 2015. イスタンブール(トルコ)

⑥山崎洋子「イギリス新教育の歴史的・現代的意義と課題－教育における『自由』を考える－」　世界新教育学会日本支部、玉川大学、東京都町田市、2015 年 6 月 7 日

⑦山名淳　「ドイツにおける『新教育』の歴史と現在」世界新教育学会日本支部、玉川大学、東京都町田市、2015 年 6 月 7 日

⑧宮本健市郎　「アメリカにおける遊び場運動の起源と展開：児童救済から市民性教育へ」関西学院大学教育学会、関西学院大学教育学部、兵庫県西宮市、2015 年 3 月 11 日

⑨ Yamasaki, Yoko　“Building a peaceful society with citizenship: lessons from British progressives, 1910-1930s,” International Standing Conference for the History of Education, 36th Conference held at the University of London, July 23 to 26, 2014 ロンドン(イギリス)

〔図書〕（計　6　件）

①Cunningham & R. Heibronn eds. *Dewey in Our Time*, London: IOE press (Yoko Yamasaki, pp.56-73)　全 189 頁

②渡邊隆信『ドイツ自由学校共同体の研究－オーデンヴァルト校の日常生活史』風間書房、2016 年　全 353 頁

③橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想』東信堂　2015 年　（山名淳：349-377 頁）全 566 頁

④山名淳　『都市とアーキテクチャの教育思想』勁草書房　2015 年　全 233 頁

⑤林泰成・山名淳・古屋恵太編『教員養成を哲学する－教育哲学に何ができるか』東信堂 2014 年（山名淳：80-99 頁）　全 332 頁

⑥L.ヴィガー・山名淳・藤井佳世編『人間形成と承認－教育哲学の新たな展開』北大路書房　2014 年（山名淳：1-16, 187-200 頁）、全 229 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
宮本　健市郎(MIYAMOTO, Kenichiro)
関西学院大学・教育学部・教授
研究者番号：５０２２９８８７

(2)研究分担者
山﨑　洋子（YAMASAKI, Yoko）
福山平成大学・福祉健康学部・教授
研究者番号：４０３１１８２３

山名　淳(YAMANA, Jun)
京都大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：８０２４００５０

渡邊　隆信(WATANABE, Takanobu)
神戸大学・人間発達環境学研究科・教授
研究者番号：３０２９４２６８